

28KB-am03

実験的ラット子宮内膜症モデル病変におけるサイトカインの発現動態
○梅澤 雅和^{1,2}, 田中 奈央美^{1,2}, 久藤 清香², 田畑 真佐子², 武田 健²,
井原 智美¹, 菅又 昌雄¹(¹栃木臨床病理研, ²東京理大薬)

【目的】子宮内膜症は、生理痛や骨盤痛による QOL の低下を伴う比較的頻度の高い婦人科疾患である。発症の原因は逆流性経血であるという説が最も支持されているが、その詳細は未解明であり、現在も研究が進められている。我々は以前に、実験的ラット子宮内膜症病変モデルにおける IL-6、IL-10、MCP-1、Eotaxin、RANTES、MIP-1 α 、CCR1 の mRNA を定量し、ヒト子宮内膜症病態と一致するこれらの発現量の亢進を確認した。今回は Th1 及び Th2 サイトカインに着目し、本疾患の発生機序のさらなる解析を行った結果を報告する。

【方法】8 週齢の雌性 SD 系ラットに対し、麻酔下で腹壁に子宮内膜を自家移植することにより子宮内膜症モデルを作製した。自家移植後 4、7、14 日目に移植部位の組織（子宮内膜症モデル病変）並びに対照組織を採取した。同時に各個体から血液も採取した。組織より抽出した RNA から cDNA を作製し、リアルタイム PCR 法によりサイトカインの mRNA を定量した。

【結果・考察】モデル病変組織について、Th2 サイトカイン IL-4 の mRNA を定量したが、対照組織に比して有意な発現量の亢進は確認されなかった。Th1 サイトカイン IFN- γ 及び IL-2 についても、対照組織に比した有意な発現量の変化は確認されなかった。子宮内膜症モデル病変においては IL-6 や IL-10 の発現亢進に伴う B 細胞及び肥満細胞の活性化が確認され、これを介した I 型アレルギー反応の病態形成における関与が示唆されている。一方で、Th サイトカインの発現に変化は確認されないことから、病態形成において Th 細胞の集積、活性化は関与していないと考えられる。病態形成に伴う病理的・生化学的変化をさらに解析することにより、本疾患の発生機序の解明並びに根治療法の確立を目指したい。